

特定非営利活動法人すがもキッズ 2024年度「学習困難児研究会」

発達障害とは病気か？

先天性の脳の異常と言われているが、一部の行動や判断が通常の子どもよりも苦手であったり得意であったりする。不得意な一部がある分、得意な部分については大変な強みを持つことも有り、早期に正しい知識のもとで周囲のサポートが受けられれば二次障害などに追い込まれることもありません。発明家のエジソンやマイクロソフト創始者のビルゲイツ、フェイスブック創始者のザッカーバーグ、日本人では野球選手のイチローさん、長嶋茂雄さん、歌手の米津玄師さん、黒柳徹子さんなどが知られています。

発達障害は治らないのか？

先天性の脳の異常であるため治療の方法は確立されていません。心理行動療法や食事療法や薬物療法を併用することである程度の症状が改善される事例もありますが完治することは難しい。

支援を必要としている子どもたちは病気ではないのか？

支援が必要な子どもたちや凸凹と呼ばれている子どもは、専門医の診断確定要件のすべてを満たしていないため発達障害と確定した診断が受けられないものの、診断要件の一部に付いては要件を満たしている可能性も十分に考えられる。最近の文科省の発表では最低でも通常級在籍の8.8%の子どもにこれらの兆候が見られることから、相模原市内の小学校だけでも通常級に在籍する生徒のうち約3,000人の子どもが何らかの支援を待っています。支援級や情緒級などに属する子どもが約1,650人ですから、いま支援を受けている子どもの約2倍の子どもたちが通常級で苦しんでいる計算になります。しかし、表面的には確定診断が受けられていないことから全ての日常生活に対し、基本的には通常級の子どもと同様の結果を求められてしまうため、診断を受けている子どもより人知れず苦しんでいる場合も多いと思われます。「大人の発達障害」なども耳にしますが、それらは子どものときに確定診断を受けられなかった人が、社会人になってから会社や仕事、人間関係に馴染むことができず、精神科などを受診した場合などに診断されることから「大人の発達障害」と呼ばれています。あくまでも先天的なものです。

発達障害児を含めて支援を必要としている子どもは、学校生活や社会生活、対人関係において、自分なりに努力をして歩んでいます。しかし、その歩幅が狭く、時間もかかり、なかなか成果や結果が出せないこともあります。そのようなときに、周りの人たちが「もっと頑張れ。」「努力が足りない。」など、自分の価値観で判断したり、自分の理想を押しつけたりしてきたら、どうなるでしょうか。子どもの意欲や目標は失われます。支援を必要としている子どもに、



前相模女子大学
子ども教育学科 特任教授
学校心理士 大里 朝彦

40歩あるくことを強要するのではなく、クラスの40人が全員一步、その子どもに近づく歩みをすることが必要ではないでしょうか。40人の歩みは一歩一歩ではなく、それぞれの子どもの考え方や行動、感性に委ねることが大事です。「一人の40歩ではなく、40人の一歩から」です。まずは、理解。そして、自分のできる行動。すがもキッズの研究会は、そのことを考え学ぶチャンスです。

「学習困難児研究会」実施について

日時：2024年6月15日(土)・10月5日(土)
2025年2月8日(土)

各日10:00～11:50(途中10分休憩)

会場：相模原市立青葉小学校 体育館

住所：相模原市中央区並木4-8-4

定員：100名程度 参加費は無料です。

※支援団体および協賛企業による
助成・寄付金で運営しております。

【お申込み方法】右のQRコードよりお申し込みください。

【講演予定者】

西村 学 (すがもキッズ代表)

林 幹夫 (臨床心理士・公認心理師)

大橋 美穂 (大橋美沙パラリンアーティストの母)

原野 聰美 (前相模女子大学中高等部学校長)

ゆいの (白百合女子大学発達心理学科在)

【お問い合わせ】すがもキッズ 042-813-8558



【第1回】
なぜ支援を必要としている子どもたちは
不登校になりやすいのか？

1. 支援を必要としている子どもたちの傾向と学校のミスマッチ

2. 発達障がいいと普通と呼ばれる子よりも、その間にいる支援を必要とする子の方がより苦戦しやすい理由

本人が学校で苦しんでいる状況や理由について、具体的に話します。支援の手が届きず、不登校になる子がいます。

【第2回】
子どもの特性を一因とした不登校の
予防と不登校時の支援

1. 子どもの特性を一因とした不登校の予防

2. 子どもの特性を一因とした不登校時の支援

「本人は不登校が多い」と意識することが大事です。その上で気持ちを丁寧に聞き、試行錯誤し、世界が広がることを目指します。

【第3回】
子どもの特性による不登校について、
今後の学校や社会に求められること

1. 今後の学校に求められること

2. 今後社会に求められること

新しい環境に入る前に、見通しを持ってると良いです。本人が成長し、能力を發揮するために、相談、柔軟な勤務形態、新たな支援機関が求められます。

支援を必要としている子ども・凸凹などの何が問題なのか？

社会の理解不足による誤った対応で起こす二次障害に大きな問題があります。その子の得意・不得意は、子どもの選り好みではなく先天的な場合もある。最近の研究では食べ物の好き嫌いも先天的なものと言われています。しかし、その先天的な苦手に対して否定し続けられたら子どもは、どれほど辛いのでしょうか。この二次障害は健康な子どもでも親の虐待などで発症する場合もあります。二次障害は後天的な病気であり、子どもを取り巻く環境がこの障害を作り出してしまう。親の夫婦げんかですら子どもの前では虐待と言われています。

どうしたら気づいてあげられる？

もちろん早期に気づくことは大切ですが、病気であるかどうかを議論することではなく、困っているかどうかが見極めることができます。例えば、忘れ物が多い子に「次は忘れ物をしないようにね。」と声をかけてしまいがちですが、どうやったら忘れ物をしないようになるのかが分からないから忘れてしまうのです。嫌な思いをしたくないはずですから、子どもだって忘れ物なんかしたくありません。方法は一律ではなく子どもによって手段は変わってしまうので答えは一つではありません。その方法を親が一緒にになって考えられるか？叱ってしまうか？によって、子どもの自己肯定感さえも低下させてしまうリスクがあります。それは非認知能力にもつながり更にはウェルビーイング（幸福度）にもつながっていきます。日本のようにこの幸福度が低い国では自殺者が増えます。日本の10～39歳までの死亡理由の第一位はダントツで「自殺」です。

不登校の理由の第一位は「無気力」です。

子どもたちと大人の視点はまるで違います。大人にとっての当たり前のことが子どもにとっては全く理解できないこともあります。大人からの目線で何かを伝えるのではなく、もう少し子どもの気持ちになって伝えてみませんか？子どもに幸せになって欲しいという親の気持ちはいつも同じであると考えたいですが、子どもに幸せになって欲しいと思うことと、無意識のうちに自分の考えを押し付けてしまうことでは、全く逆効果になってしまいます。子どもには本当の意味での幸福感を得て欲しいと思います。それは「偏差値やIQ」という学力よりも「非認知能力(EQ)」によって大きく変化します。そのためには否定語（それはダメだよ）を使わず肯定後（そうするといいね）と声掛けをして自己肯定感を高めることが重要です。「すがもキッズの研究会」を通じて多くの大人たちが子どもの自己肯定感を下げてしまうようなNG行動を学習し、少しずつでも相模原市内に浸透させることができたら、先生方だけでは手が届かない約3,000人の困っている子どもたちに少しずつでも何らかの支援が届くようになるのではないかと考えております。学校任せにするのではなく、保護者や地域が一丸となって取り組まない限り改善はされません。公的な窓口があっても子どもはそれを利用できないからです。ちなみに、偏食が激しい子どもや「ありがとう」が心から言葉に出来ない子どもは注視して付き合うことが大切です。



すがもキッズグループ代表
心理カウンセラー 西村 学

【後援】

相模原市

相模原市教育委員会

相模原市社会福祉協議会



【協賛企業・団体】※敬称略

キリン福祉財団

株式会社 育伸社 横浜営業所

カットスタジオ カズ 開成企業株式会社

教育開発出版 株式会社 横浜営業所

中央教育研究所株式会社 有限会社 開成図書出版

株式会社 tassa 株式会社 プロッサム 横浜営業所

NPO 法人 ぴあっと 株式会社 ユニックス

株式会社 明石スクールユニフォームカンパニー

横浜営業所